

バロツソ・ベル・マリア・イザベル 提出 学位申請論文（課程博士）

『身を隠したまひき神々―『古事記』上巻の比較神話学的研究―』審査要旨

論文の内容の要旨

本研究は論者の元指導教授・青木周平氏から、『古事記』冒頭の神々はなぜ「独神」であり「隐身」であるのか、『古事記』の本質を考える上で、たいへん重要な手掛りがあるという示唆を受けて出発している。しかしながら、この課題に対して答案を書くのは、容易ではない。「独神」・「隐身」についてその記述が少ないからである。そこで論者は、比較神話学的方法によって、困難な課題に接近する。以下、序論、前篇、後篇の要旨を述べてみたい。

一、序論では、ギリシヤの神々には抽象的な概念を表わす神々と、擬人化された人間のような性格や生き方をする神々と、神々のあり方に二つの時期があるこ

とを指摘する。そして『古事記』冒頭の「独神」「隐身」として記述されている神々と、男性・女性に表象される双神として出現する神々との間に、一線が引けるのではないかと主張。但し、ギリシャ神話においても、抽象的な概念を表わす女神たちにも神人同形説と捉える見方がある。一方『古事記』においても、抽象神を双神のうちに見出す考え方もあって、線引きを明確にすることは難しく、その点もギリシャの神々と類似していると言う。

二、前篇は「『古事記』の冒頭に見られる『並獨神成坐隐身也』について」と題して、(1)先行研究の概略(2)先行研究の批判的考察(3)北野達「隐身の神」の要約及び批判的考察(4)結び―神々の隐身についての結論の、四節に分けて論じている。三、後篇「『古事記』の後段に於ける『身を隠す』についての考察」においては、(1)『古事記』の後段に於ける神の身に関連するはたらきについて(2)天岩屋戸の段について(3)大国主神の試練について(4)結び、となっている。終りに、四、結論で論者なりの仮説を提示する。

前篇(1)では本居宣長をはじめ倉野憲司、武田祐吉・中村啓信、西郷信綱、西宮一民、山口佳紀・神野志隆光らの「独神」「隱身」に関する注釈書十六冊から引用、又外国語訳(英語・伊語・仏語・独語)六冊の注釈書を蒐集・紹介している。

(2) 先行研究の批判的考察において、「隱身」について四つの解釈が可能であるとまとめる。①神々は身を持つがその身を現わさない(宣長、倉野)。②神々は幽冥界にいる(尾崎暢殃)。③神々は死生がない(尾崎知光)。④神々は抽象的な存在である(西郷)。このうち②と③説は説得力に欠ける、又外国語訳にみられる注釈も有意義とは言えないと批判。結局、神は身を持つが姿を表わさないという①説か、神々は抽象的存在という④説かが有効であるとする。そして①説か④説かを中心的課題として取組んだのが、北野達「隱身の神」(『國學院雜誌』平成二十三年十二月号所収)であるとし、次節においてこの論考を要約し批判的に論じている。

(3)では、始めに「隱身の神」の各節ごとに詳細に要約しているが、結論のみ述

べたい。北野説によると、「天地初発之時」無条件で存在するのは、高天原と未完成の「クニ」のみである。天之御中主神は出現したが、身は持たない。「生成力の原理」である高御産巢日神・神産巢日神も初めは身をもたず、二神の働きによって、「未完成のクニ」から「萌騰之物」に因って次々と神々が生まれ、伊耶那岐・伊耶那美命の聖婚神話につながって行く。そして産巢日の二神が身を獲得したのは、伊耶那岐命以前の於母陀流・阿夜訶志古泥神の出現した頃とする。このような見解に対して論者は、「造化の神々の中で、二柱の産巢日の神々のみ身を獲得する理由」や「身を隠すことによって神々が意義ある役割を果たさないと理由」などが明らかにされていないと批判的に考察している。(4)結びにおいて、『古事記』冒頭の「隐身」の神々は、抽象的存在として、初めから身を持たないと考えべきと主張。その理由をいろいろ挙げているが、他の神々と関連性をもたず、その関連性も説明されていないからと言う。又北野説では二柱の産巢日神に後段では身を持つ神になるとするが、抽象神としての産巢日神と、具象神

としての産巢日神とは別の神ではないかという仮説を提示、その視点を強調する論を展開している。

後篇三、「『古事記』後段に於ける『身を隠す』についての考察」においては、

(1)「神の身に関連するはたらきについて」と題して、自分の身を自覚し性の識別をする伊耶那岐・伊耶那美命について論じた「有性の神々」「有性の発生」、「身体の変化」および「『古事記』に見られる服装倒錯について」などの項目を立てて考察。このうち「身体の変化」の項では、伊耶那美命と迦具土神の死体の働きについて比較し、両神とも死体のほぼ同じ部分に言及しながら、迦具土は神々を生み伊耶那美は八種の雷を生み、島々や神々を生成した大母神（グレート・マザー）が死者の世界の大神に変化したことなどを論じている。

(2)「天岩屋戸の段について」は「隠り身」の代表的な例として天照大神の天岩屋隠れについて、ギリシヤ神話のデメテル女神との比較神話学的考察を展開する。はじめに「神話とは」や「神話と儀礼の関係」などについて論じ、一般に儀礼が

神話に先立つと認識されているが、論者は神話があつて儀礼が成立などの論を、事例をあげて述べる。又「民族の無意識的な記録としての神話」や「神話に隠れている社会の形成」においては、「集団のアイデンティティ」は、神話によつて継承されて、集団の一体感が強化されて行くし、神話のはたらき方は、社会の基本的な規範に結びついているという。終りに「隠れた女神」の項では、天照大神と豊穰の女神・デメテルそれぞれが男神の乱暴に対して、天照大神は天岩屋にデメテル山中の洞穴に閉じ籠り、一方は天上天下が闇黒に、一方は地上の作物が枯れて飢餓をもたらすなどの類似性がみられる。しかしその解決法には、デメテルの場合は「正義」が、天照大神の場合は「集団の力」によるなどの相違があると指摘する。

(3) 「大国主神の試練について」この章では、神話には古代世界が反映され、原始信仰に関する儀礼が現われているという立場から、日本神話とギリシャ神話の比較を通して、死や死後観に関する類似点や相違点を論じている。多くの事

例の中で、二、三取り上げてみたい。この世とあの世の境として、ギリシャ神話では三途の川の存在がみられるが、日本神話では「千引石」と「事戸」をわたすとあつて相違が明白。しかし両者ともあの世からの帰還後、水による清めは近似しているという。又伊耶那岐命が黄泉国へ伊耶那美命を連れ戻しに出掛け失敗する物語は、ギリシャ神話のオルフェウスが地下の世界へ旅立ち、最愛の妻を冥王ハデスから取り戻しに行き不首尾に終る物語と酷似している。そしてオルフェウスと伊耶那岐命も、シャーマンの役割をもつという説を肯定する。大国主命もシャーマンの要素があることを論拠を挙げて展開。おわりに、神話に現われる死後観は古代人が持った憂慮を反映し、死後の存在の可能性は最重要課題であり、シャーマンが体験で語られたことを神話に集めている。その意味で、神話における死後観は、ユング的な集団の共通無意識を反映すると言えようと結んでいる。

四、結論 『古事記』冒頭に出現する「独神」「隐身」の神々についての結論を、以下のように述べている。これらの神々は、抽象神であり、他の神々と関係をも

たない不変の神であるという。双神として誕生する神々は、先行研究にみられるように国作りでの過程ないしは伊耶那岐・伊耶那美命の聖婚につながるための存在とする。伊耶那岐・那美二柱の神の誕生以後、男女の性別が明白となり有性生殖が可能になる。それ以後の神々の身体は無常となり、滅ぶこともある存在として捉えられると主張する。なお後篇の二つの論考は各章ごとに結論が述べてあり、割愛している。

論文審査の結果の要旨

本論文は前述したように、『古事記』冒頭の「独神」「隱身」の神々に関する考察から出発し、研究方法は比較神話学的接近を試みている。論者は「隱身」の神々とは抽象的な存在であり、独立した不変の神であると主張。身を持つがその身を隠して現わさないという本居宣長の説、またそれに追従する多くの注釈者の説

を斥ける。しかも北野達氏の説にみられる「隐身」の神々には、高御産巢日神・神御産巢日神以外は有力な働きをしない、或いは後になって身を持つようになるという見方も斥けている。その意味では、従来の学説を参考にしながらそれを打破する大胆な仮説を提起したと評価されよう。

このような仮説を提示できた背景には、比較神話学的視点によるものと思われる。ギリシヤ神話の神々の初めには、抽象神・クローノス（時間の神）などの存在があり、『古事記』冒頭の神々と類似の神々の存在が考えられたからであろう。

しかしながら、このような仮説にはいくつかの課題があるのは、当然だ。その中でもっとも大きな問題は、天之御中主神をはじめ「隐身」の神には、『古事記』後段では再度出現することはないため、「隐身」の神々は身を現わさず有力な働きをしない、と説明することは可能かもしれない。ところが、高御産巢日・神産巢日二柱の神達は、後段においてもそれなりの活躍が記述されている。この点の課題を、どのように説明するかが重要かつ必然となろう。そこで論者は、この問

に対する解答を求めて新見解を推考し、『古事記』冒頭の高御産巢日神と後段に現われる高御産巢日神とは、別の神であるという主張をする。そのように推論した根拠として注目したのが、天若日子の段にみえる「是高木神者、高御産巢日神之別名」の箇所である。天若日子が鳴女を射殺してしまった矢が、天安河の河原に居た天照大神と高木神の所に届いたという一文の後に、やや唐突にこの注記のような文章が続いている。このような記述の仕方に注目し、論者は『古事記』にみられる他の神々の最初の登場の例を検討。その結果、神々の最初の登場には、二つの型があるとして(1)神名の紹介から始まる(2)父親の神との関係に続いて紹介されると主張する。その意味で、「叙述の後の挿入」と捉えてよいのではと推測している。とすれば冒頭の高御産巢日神と後段の高木神とは、元来別の神であった可能性も無いとは言えなからう。

次に『古事記』冒頭の高御産巢日神と神御産巢日神と、後段に出現する二柱の産巢日神と別々の神であるという主張を補足するのが、二柱の産巢日神は元来一

体であったという論考の見方である。その論拠として、両神とも産巢日神であることは明白でありながら、両神の相違を明示する「高御」と「神」という文字は美称以上の意義をもたない。天之常立神と国之常立神の場合は、高天原と葦原中津国を「天」と「国」とで明らかにしている。ところが、「高御」と「神」との相違だけでは、神名が十分に対応していないのではないかと疑問を投げかけるなど、両神は元来一体であったことを推論し、冒頭の「隐身」の神々は、後段の産巢日神と相違することを論証しようとする。

後篇の三つの論文は、内容の多くが比較神話学的研究になっている。それぞれの論考に有意義な主張はみられるが、どこに論者の独自の見解が提示されたかがわかりにくい。先行研究の整理が十分でなかった結果と思われる。自らの興趣に引きずられた論の展開になっているようで遺憾である。

全体としては外国人としてのハンディーを背負いながら、勇気をもって仮説や新見解を提示している点、好感が持てる。もちろん論者の主張が、十分に説得力

を有するとは言い難い。日本語の表現力の難しさのための欠点は多くあるが、本論文の申請者バロツソ・M・イザベルは、博士（神道学）の学位を授与せられる資格があると認められる。

平成二十六年二月十五日

主査	國學院大學大学院客員教授	安蘇谷 正彦	印
副査	國學院大學教授	武田 秀章	印
副査	國學院大學教授	嵐 義人	印